

生涯「伝える」人でいたい



花火鑑賞士・アナウンサー ありがまき **有賀 真姫**さん

略 歴

昭和54年茨城生まれの広島育ち。大学卒業後、エフエム鹿児島のアナウンサーとして活躍。5年の局アナ生活の後、フリーへ転向。現在は㈱キュープラスの取締役・アナウンサーとして、エフエム鹿児島のパーソナリティーやイベントの司会など、幅広く活躍している。

夏と言えば、やっぱり花火。そんな花火に関する資格、「花火鑑賞士」。「花火ソムリエ」とも呼ばれるこの資格を、県内で初めて取得し、今年の夏も花火の素晴らしさを多くの人に伝えようと張り切っている。

CloseUp

クローズアップ

花火鑑賞士との出会い

エフエム鹿児島のパソナリテイーとして活躍する有賀さんの仕事の一つに、花火大会のラジオ中継がある。入社してから花火大会の中継を担当しているが、リスナーに花火の魅力を十分に伝えられていないのではという思いがあった。

そんな時、県内の花火大会の中継と一緒にあった、ある先輩DJの実況に衝撃を受けた。「花火の描写がとても素敵で、話を聞いているだけで、すぐにどんな花火なのかイメージできました」

その先輩とは小川もこさん。全国第1号の花火鑑賞士の1人だ。「花火鑑賞士」の魅力を知った有賀さん。早速、自身もその資格を取ろうと考えた。

しかし、「花火鑑賞士」の存在を知ってから、試験を受けるまでには5年くらいかかった。試験は年に1回、花火で有名な秋田県の大曲^{おおまがら}で行われる。パソナリテイーとして多忙な毎日を通す有賀さんにとって、スケジュール調整が大きな障害となった。

試験での思い出の品が7号の花火玉だ。試験前の花火の歴史や構造に関する授業の中で、一番遠方からの受

験者に、花火師でもある講師からのプレゼントだった。「一番遠くから来ている人は？」との問いかけに自信を持って名乗りを上げた。試験には一発で合格。試験前に番組内で宣言していたこともあり、「合格できて本当にうれしかったと笑う有賀さん。花火に関することを、小川さんに教えてもらったり、自分で調べたり、5年間の積み重ねがあったからこそ合格だった。」



受験の際にもらった花火玉は宝物

一生に一度の花火のために

花火鑑賞士の資格を取つてからは、花火大会の司会以外にも、解説の依頼が来るようになった。「次の花火が打ち揚がるまでにちよつとした間がありますよね。そのちよつとした時間に花火のうんちくを話すと、待ち時間も楽しんでもらえるんですよ」

花火を見ていないリスナーからも、「会場で花火を見た気持ちになれませんでした」という言葉が届くようになった。その時初めて、「ラジオで花火を伝えられた」と思ったという。

夏の過ごし方も大きく変わった。花火のイベント情報が出る時期が近づくと、どこかそわそわして、花火という言葉に敏感に反応するように。花火は伝統的なものと思われがちだが、流行があり、その時々を流行を知り合いの花火師に教わることも。「毎年花火の季節が近づくと勉強です。花火の解説書を読んで、流行の花火を学びます。花火の写真がたくさん載っていて、見ているだけでとても楽しいですよ」と話す。



解説書はバイブル

最近ではパステルカラーのものや、型物と呼ばれる、星やスマイルマークをかたどつたものが流行なのだとか。

花火の魅力を尋ねると、「その時の花火は一生に一度しか見られないこと」との答えが返ってきた。花火は湿気や風などの天候に左右されるし、場所によって背景も変わり、見え方も違う。花火玉を作つた花火師の気持ちもその時々で異なるし、何より見る側の気持ちも同じではない。「一生に一度しか出会えない花火にその夜は会え

る。その瞬間を味わえるのが一番ですね」

「伝える」がキーワード

有賀さんは花火鑑賞士以外にも、ツアーコンダクターや野菜ソムリエなどの資格を持つ。どの資格に関しても、スタートは「どう伝えるか」という気持ちだ。パソナリテイーとして、人に伝えたいという思いが常にあり、「資格は人に伝えるための手段」と有賀さんは言う。

現在、スポーツ番組を担当していることもあり、マラソンや水泳など、スポーツの分野にも挑戦の幅を広げている。もともとマラソン挑戦のきっかけは、各地に行つて走ることで交流し、その地を知ることだった。今は「マラソンを通して何を伝えられるか」が楽しみだという。

ラジオは言葉で伝えるもの。「言葉でイメージつて変わるし、一言入れるだけで伝わるようになるんです。聞いていて情景が浮かぶような、そんな言葉を大切に伝えられるアナウンサーを目指しています」と笑った。彼女自身の中に「伝える」という軸があるから輝ける。揺らぐことのない信念の強さこそが、輝きの源に思えた。